

第7 季節調整

1 季節変動と季節調整

消費者物価の変動には、季節による特有の値動き⁴⁸（季節変動）の影響が含まれる。季節変動の影響を除いて消費者物価をみるためには、指数の前年同月比で変動をみる方法がある。前年同月比は容易に計算できるため、消費者物価指数では前年同月比によって季節変動の影響を除くことが多い。ただし、前年同月比の動きには、足下の物価の動きに加えて1年前の物価の動きによるものが含まれるため注意が必要である。

このほか、指数に含まれる季節変動を推計し、これを除去した指数（季節調整済指数）をみる方法もある。季節調整済指数は前月との比較が可能であるため、直近の物価変動を見ることができる。

季節変動の推計方法には様々なものがあるが、2020年基準消費者物価指数の季節調整済指数は以下の方法で作成する。

2 季節調整済指数の作成方法

季節調整の方法は、アメリカ合衆国のセンサス局で開発されたプログラムX-12-ARIMAを用いる。X-12-ARIMAで設定するスペックファイルは、「Ⅲ 付5 X-12-ARIMAによる季節調整の詳細」参照

3 季節調整済指数の作成に用いるデータ

季節調整済指数の原系列⁴⁹には、2010年1月以降の指数を用いる。ただし、2010年1月から2019年12月の原系列には、「Ⅲ 第6 新・旧指数の接続」で作成した接続指数を用いる。

4 季節調整済指数の改定

毎月公表する時系列データの季節調整済指数は、始期である2010年1月から前年12月までのデータから求められる当年1月から12月までの季節要素（推定季節指数⁵⁰）で当年の各月の原系列を除いて算出する。その後、当年12月までのデータがそろった時点で、当年のデータを含めて再び季節調整を行い、翌年の推定季節指数を計算するとともに、過去に遡って季節調整済指数を改定する。このように、季節調整済指数は、毎年新しいデータが加わる度に、それを含めて計算することにより、始期である2010年1月以降の値を全て改定する。

5 季節調整済指数の作成系列

次の8系列の指数について、全国及び東京都区部の季節調整済指数を作成する。

⁴⁸ 例えば、衣料品は季節の変わり目が近づくとも価格が下がることが多い。

⁴⁹ 原系列には端数処理前の指数を用いる。

⁵⁰ 端数処理前の（推定）季節指数を用いて季節調整済指数を算出する。なお、季節調整済指数は小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで表章する。季節調整済指数の前月比は、端数処理前の指数により計算し、小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで表章する。

<基本分類指数>

- ・総合
- ・生鮮食品を除く総合
- ・生鮮食品及びエネルギーを除く総合

<財・サービス分類指数>

- ・財
- ・サービス

<ラスパイレス連鎖基準方式による指数> (全国のみ)

- ・総合
- ・生鮮食品を除く総合
- ・生鮮食品及びエネルギーを除く総合

[参考] 季節調整の方法

季節調整の方法には、総合、10大費目、中分類といった項目の指数を、分類項目ごとに季節調整する方法（単独方式）と、品目ごとに季節調整を行い、それらの季節調整済指数をそれぞれのウェイトで加重平均し、上位項目の季節調整済指数を求める方法（インプリシット方式）がある。

消費者物価指数においては、例えば毎年4月に価格変動する授業料のように階段状の動きを示すものなど、季節調整のモデルに当てはまらない品目がある。このことから、消費者物価指数の季節調整には、総合指数などに対する単独方式を採用している。